４．３．入学時からの主な思い出

（「一期一会」1 号に書かなかったことなど）

杉本　良樹

1．入学時からの 4 年間

我々昭和29年入学組が受験した頃は横浜国立大学の競争率は二期校の雄と見なされていた所為もあり工学部と経済学部の競争率はかなり大きく造船工学科も 16.4 倍だった。その後も受験者の人気は増加、昭和 31 年には 25.5 倍に達した。

入学後一年間は横浜市中区の旧神奈川師範学校の校舎を使って一般教養学科の授業を受け、二年目から南区の弘明寺の旧横浜工専に移って専門学科の授業を受けることになった。弘明寺での 3 年間は青春の真っただ中、勉学に専念する者、クラブ活動にどっぷりの者、趣味の賭け事に熱中する者、恋愛等々と二足、三足、数足の草鞋を履く者もおりと夫々大いに青春を謳歌し夫々楽しい三年間を有意義に過ごせたのである。同期入学者のうち二名は入学後三年目の 3 月東大の文科系学科に転校したがその後も同期生としてお付き合いが続いている。

２．造船工学科の授業の思い出

弘明寺の校舎での造船工学の専門学科の授業で後述の先生方がそれぞれ担当される科目を生徒の身に着くよう懇切丁寧に教えてくださった。

ただ学生の立場から有難かったのは期末試験の時、問題を黒板に書き終わると先生は教室から出て行ってしまい後は学生のしたい放題にさせてくれたのだった。これも横浜高等工業の初代校長の鈴木煙州先生の名教自然の精神（自学自発）を生かそうという配慮だと思うのだが、私は先生方に確認はしていなかった。

冬の教室は石炭ストーブが設置されていて暖房がよく効いており教室の左前方の席は特に暖かく前夜の麻雀で疲れた体を居眠りで癒すのに絶好の席だったことも懐かしい思い出での一つである。

在学中の私は横浜国大工学部(以下横国大)の前身横浜高等工業専門学校の座右の銘「名教自然」の自学自発の精神に則り専ら教室は寝不足解消の場所として利用したと記憶している。

３．工場実習と就職先

私は 3 年生の夏、当時の浦賀造船での工場実習に参加した。その時先輩や同期生の数人で実習をさぼり工場裏の海岸でだべっていたとき近くで水泳に来ていた数人の男の一人が酒の酔いのせいもあり溺れて水死したのだ。それが警察沙汰になり、工場実習をさぼっていたことが造船所の人にも学校の先生方にも分かってしまい大目玉を食らったことも懐かしい？思い出である。

授業ではないが 2 年生の時から毎年造船所での工場実習が課せられたのも横浜の造船学科の特徴の一つだった。東大などほかの造船科の学生との交流や小旅行も楽しい思い出の一つになった。+

更に就職後の職場で工場実習で知り合った他校出身者と一緒に働くことになったと言う話も聞いたことがあり人生の巡り合わせの面白さとして記憶している。

2 年生の夏休みに最初の工場実習に三菱横浜を選んだその時の経験がその後の私の人生に大きな影響を及ぼしたのである。それは工場の現場作業のすさまじい騒音である。当時の造船会社では修繕船は言うに及ばず新造船でもリベットがまだ多く使われていたのでその騒音は私の我慢の域を超えていたのだ。私は造船所の現場工事の騒音を避けて、船主の工務関係を狙い家庭の事情も勘案し最終的に転勤の少ない大洋漁業株式会社【以後大洋】に決めたのである。

４．福井義人君との交流

同期生の福井義人君との交流について書かせていただく。

1）大学生時代

当時厳しい入試をクリアして入学した新入生 28 名の中に福井義人君がいた。早速、同級の上條君の誘いで立野の丘にあった旧神奈川師範学校の屋上が我々遊び好きの麻雀教室になり、これが我々の遊び好き仲間のグループの発足であった。それからの 1 年間、勉強はそっちのけで、教養課程の試験は要領よくこなし、昭和 30 年 4 月弘明寺の工学部造船工学科に移った。

入学 2 年目の春休みに、麻雀で親しくなった私と福井君は春休みを利用して福井君が提案した関西・九州旅行を実行することにした。 福井君は天衣無縫な性格、一方私はどちらかと言えば几帳面な性格なのでこの二人のコンビに問題はないと思ったのである。

まず福井君のご親戚がお住みになって居られた奈良を根城に奈良と京都の観光をした。私にとってこの旅行は、両親の出生地四国の愛媛・高知以外では初めての遠距離旅行であったので興味津々だった。

奈良では春の絶好の好天に恵まれ、福井君の親戚の家の女の子を交えて新緑の若草山で楽しいひと時を過ごした。そのあとは奈良の観光で欠かせない法隆寺で、猿沢の池も見逃せない見どころだった。奈良では野生の鹿があちらこちらに見かけたのを覚えている。

次は観光バスに乗っての京都見物で、京都の観光名所、東西本願寺銀閣寺、金閣寺、平安神宮、清水寺の舞台などほとんど巡ったと思うが、観光バスでの観光は自分で好きなところを観光するのとは違い決まりきった場所をめぐるので、ことさら印象に残ったところはなかった。特記することは、京都はじっくり時間をかけて観光するべきだということである。

京都を離れて次は九州に行き、佐賀市にすむ福井君のご親戚を訪ねて美味しいカレーライスをご馳走になったことが頭から離れない。佐賀では特に観光をした記憶はない。

九州まで来たのだから長崎まで行こうやということになり、船で長崎へ行った。長崎は見るべきところは多いが、二人の興味は原爆の被災地の象徴ともいえる、まだ復旧もされていない浦上のキリスト教の教会を見に行きその無残な姿に二人とも胸を打たれた。その他有名なグラバー邸等を巡った。

２）就職後の交際

福井君は造船科を昭和 33 年卒業後舞鶴重工に就職し艤装設計に従事、その後退職帰京し、運輸省管轄の日本舶用機械輸出入株式会社に入社した。

福井君が舞鶴から帰京し新橋に近い運輸省の管轄会社に移り、私も大手町の大洋漁業本社から新橋近くでの漁船協会の会議に出席する機会が増え、福井兄と新橋周辺で昼食を一緒にする機会が多くなり、一方福井兄

が大手町のマルハ本社に立ち寄り社員食堂で昼食を共にする機会も増えたなど、二人は頻繁に会うようになり福井君夫妻に女のお子さんが生れたときには家内と一緒に、誕生のお祝いに福井君の世田谷の自宅に行ったこともある。

交際が深くなるにつれ当時団地造成の土地開発のブームに我々も乗ろうということになり、栃木県大田原市で（株）東洋観光が開発販売中だった東洋グリーンタウンの土地の近くにブリジストンが開発した区域もあり将来性充分という甘言に乗せられてしまったのです。

（令和 3 年 11 月 21 日）

５．恩師との交流の再開

私は前記２の写真の先生方と特記するような個人的な思い出は持ち合せておりません。強いて記すなら卒業論文の発表の時この学校の水槽の造波装置では論文の課題である模型船を使っての転覆の条件を満たすことが不可能だったと述べて、発表を聞いておられた先生方の失笑を買ったことぐらいです。

卒業後大洋漁業(以下大洋)の船舶部で大洋の大小各種の船舶の技術管理の仕事に携わることになりました。当時小型漁船の建造に当たっては水産庁漁船課の建造許可が必要でした。許可の条件の一つに初めて漁船の転覆事故防止の為の規則が採用されたのです。その規則の作成に私たちの卒論の転覆実験も関係があると知り我が母校の先生方も捨てたものではないと感心した記憶があります。

（卒論は犬木君と二人で吉岡先生のご指導で船舶はどのくらいのエネルギーをもった波浪を受けたときに転覆するのかを模型船と学校の水槽に設けられていた造波装置を使って明らかにするというものでした。）

大洋に就職し数年後のこと、私は工場実習、乗船実習を終えて職場の日々の仕事にも慣れ社船の建造計画、工事現場立ち合いなども習得し一人前になった頃、大洋は南氷洋の捕鯨事業に 3 船団を出すなど第 1 期全盛期を迎えており船舶関係の技術社員が不足しており新社員を募集することになったのです。船舶関係の技術者は特殊扱いでだれを採用するかは人事部はノータッチで船舶部社員のコネで採用していたのが実態でした。当時の船舶部長大木氏に東大で同期生だった小山先生に学生の推薦

を依頼されたのです。小山先生は一人の学生（N 君)を推薦するからその学生に大洋の船舶部の仕事などについて説明せよと命じられました。N 君は有能で特に英会話が得意だったので次第に国際化してきた大洋の海運事業の分野で大いに活躍の場を得て、退職時には取締役船舶事業部長まで登り詰めました。この N 君の入社が決まってから大洋の船体関係技術者は東大と横浜大学卒の造船学科から必要に応じて交互に採用する方式が定着しました。その後横浜大学造船工学科からは H 君，NN 君が採用され東大からは 3 人が採用されました。

私と先生方とのお付き合いはこの新入社員の募集を通じて再開しました。毎年学生の就職担当の先生が変わるので大洋が船体関係の技術社員の募集することが決まると私が大洋での仕事について説明のため学校を訪れその年の就職担当の先生に応募する学生の推薦をお願いし有能な人材を確保する役目を果たすことになったのです。大洋への就職を希望する学生が複数の場合もありましたが、入社試験はなく大洋の船舶部の担当常務または専務取締役と私が立ち会い面接のみで採用を決め、面接に来るのはすでに大洋を希望する学生の中から学校の方ですでに推薦する学生を決めているので競争は全くなく実に簡単なものでした。